

かずさの博物誌

ホウロクシギ ～長いくちばしの大型のシギ～

文・写真／成田篤彦

九月末の秋晴れの日に上総の海岸で野鳥観察のベテランのTさんに声をかけられた。

「ホウロクシギがいるので、案内します」とわざわざ波打ち際まできて誘ってくれた。

「え！ありがとうございます。」とワクワクした。

というのは、ホウロクシギはカラス位の大きさだが、日本に訪れる最大のシギの一つである。

二人で奥まった泥浜にいった。「あれ、いない。南国へ飛び去ったか？」とTさん。

しかし、Tさんが双眼鏡であちこち見渡し、「あ！いました。座っているから分からなかった。ヘリコプターが飛んだので、腰を下ろしたのか？」と言った。

「うづくまっている姿が見られるとは」と嬉しくなった。そのわけは



▲身をひそめるホウロクシギ
2010年9月木更津市＝成田篤彦撮影

この地には彼らを襲うオオタカやハヤブサなどの天敵がいる。だから、「大型のシギが隠れ場所のない泥浜

でどうやって彼らから逃れるのか？」前から疑問に思っていた。

「泥浜の竹の棒が流れ着いている先に座っています」とTさんが教えてくれた。しかし、双眼鏡で見るとどこにいるのか、まるで分からない。

「いいですか。背の高いヒバの木の下に四角の石がありますね。それと数本の海藻がついた竹棒が横渡っています。その間に座っています」と丁寧の説明してくれた。

打ち上がった緑色の海藻の先に細長いくちばしがある薄茶色のこんもりしたものに気づいた。

「あ！いました」

漂着したゴミや海藻のある泥浜の色に見事に溶け込んでいる。彼？の身を隠す術に「まいった」と思った。「わたしはこれで引き上げます。」とTさんは戻られた。

早速、ファインダーを覗いたが遠いためにぼやけている。

Tさんが後ろから「もっと近づいても逃げませんよ」とありがたいアダイスをしてくれた。

そこで、泥浜を這うように近づいて行き、流木に腰を下ろした。

すると彼？はゆっくり立ち上がり、首を傾けて片目で泥浜をみつめ、長いくちばしをカニ穴に根元までグイと差し込んだ。そして、穴の中のチゴガニをくちばしの先端にはさみ、カニを空中に浮かせて呑み込んでいた。それを何度も繰り返していたが、たまに浮かせたカニが口から外れることがある。「カニ捕りの名手でも



▲カニを食べるホウロクシギ
シギ科 全長約62cm。旅鳥。極東地域の固有種。繁殖地はオホーツク沿岸地方やカムチャッカ半島などの湿原。冬季に南に渡る。千葉県最重要保護生物。
2010年9月木更津市＝成田篤彦撮影

▲飛翔するホウロクシギ
2010年9月木更津市
＝成田篤彦撮影



失敗するのか」と面白かった。

それにしても細長いくちばしとダチョウのようにたくましい脚。堂々としている。

再びヘリコプターが来ると腹ばいになり、空を見上げた。飛び去るとまた、広大な泥浜で餌を捕り始めた。動いているものは彼？だけであった。

そのうち、何かに驚いて声を上げて飛び立ち、岸壁の陰に姿を消した。

「ひょっとして、岸壁の裏手にいるのでは？」と思い、その周りの杭や石の後ろから、岸壁の裏側を覗きこんだ。なんと眼の前で海水に体を沈めつばさをバタバタさせていた。

「絶好のチャンス」とシャッターを切りまくった。

彼？は、水浴びをした後にぶるぶると体を震わせて水を弾き飛ばしたり、羽をくちばしですいたり、脚で首を搔いたりしていた。時には目を閉じて、十分にくつろいでいた。

さて、ホウロクシギは国内では数少ない旅鳥または稀な冬鳥。千葉県では春季と秋季に一羽から数羽見られる珍しいシギだという。主にカニ類、貝類、シヤコ、ゴカイ類、小型の魚類などを食べている。

千葉県レッドデータブック二〇〇〇年によると世界での推定個体数は二万千羽だそうだ。

彼等には上総にはあまり訪れないから、とても運が良かった。それにしても毎年、この泥浜に複数で訪れて欲しいものである。

〈参考文献〉千葉県の自然誌本編7



水浴びをする
ホウロクシギ
2010年9月木更津市
＝成田篤彦撮影